



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」

Ver.2-036 号 (通巻 267 号)

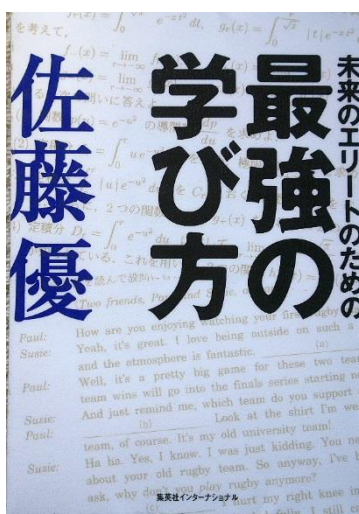
【 Doshisha Science Now 】⑥

サイエンスコミュニケーター

— 同志社での養成講座がなぜ、注目されているのか —



野口範子生命医科学部教授のお勧めで『未来のエリートのための最強の学び方』(集英社インターナショナル・2019/2/5)を過日、手にした。その第2部に「真の意味のエリートとは」という佐藤優教授と野口範子教授の興味深い対談があった。



そこに「サイエンスコミュニケーターの養成で東大、北大、早大はどこでつまずいたのか」に目がとまった。そこで同志社大学の「サイエンスコミュニケーター養成講座」はなぜ、順

調に進んでいるのかを探った。今号はその報告である。

同志社大学の成功要因は、次の5つにあると思われる。①. 明確で強い設立の志、②. 基礎から応用まで充実したカリキュラム ③. シンポジュームの併用の教育、④. 名物教授陣 ⑤. 副専攻という門戸を開いた仕組み。これらについて順次述べる。

1. サイエンスコミュニケーター養成講座の設立趣意

原発事故の時、情報が混乱した。また、STAP細胞事件も理解が得られるような情報や報道が提供されなかった。それは広報担当やマスコミの人たちにサイエンスコミュニケーターの素養が不十分だったからである。

同志社大学は、早くからそのことに着目し、サイエンスコミュニケーターの養成講座を設けている。その設立趣意を確認いただきたい。執筆は生命医科学部野口範子教授。

「急速な科学技術の発展に伴って、一般社会では原発、地震対策、遺伝子組換え食品、感染への対応などに対して、誤認識による過度の不安や敬遠、そして過激な賞賛などが発信され、一般の人々がどう対処していいかわからないという状態に陥ることが多くなっています。

このような時代に必要なのは、しっかり科学を理解して自分で判断する能力のある人の育成です。科学リテラシーを持たない人々が増えることによる経済的損失も大きく、社会の隅々にまで科学を理解する人を養成することが、今後の我が国の将来を左右するといっても過言ではありません。

同志社大学では、関西で初めて、学部生を対象に文理を横断するサイエンスコミュニケーターを育成する副専攻を立ち上げることにしました。

本副専攻では、科学技術に関する基本的な知識を学ぶとともに、将来のキャリアパスを広くとらえ、新聞・放送などのメディア・教育界・産業界・官庁・病院などからも講師を招くとともに、ビジネスワークショップ、メディカルワークショップ(短期インターンシップ)と題して社会に出かけて、科学技術やその情報発信に直接関与する人たちとの議論などを行うことも重視しています。

生命医科学部教授 野口 範子

.....

2. 2019年度シラバス(サイエンスリテラシー科目群)

つぎのように幅広く、深い科目が勢揃い出来たのは「生命医科学部」をベースに、各関係機関の協力があってからだろう。

- 科学技術概論Ⅰ（科学技術社会論） ・科学技術概論Ⅱ（調査方法論／統計学）
- アウトリーチ実習（科学技術表現実習） ・サイエンスライティング
- サイエンスとインテリジェンス（体系知(科学)と宗教）
- サイエンスとインテリジェンス（集中読解と議論）
- サイエンス・ノウ1（生命科学） ・サイエンス・ノウ2（生命医科学入門）
- サイエンス・ノウ3（報道と広報の現場、ビジネスワークショップ基礎講座）
- サイエンス・ノウ4（科学史、原子力、感染）
- サイエンス・ノウ5（医療の現場、メディカルワークショップ基礎講座）
- サイエンス・ノウ6（生命科学と社会） ・サイエンス・ノウ7（組換え、食、エセ科学）
- インターンシップⅠ・ビジネスワークショップ
- インターンシップⅡ・メディカルワークショップ

3. サイエンスコミュニケーター－養成副専攻講演会（シンポジウム）

同志社大学での養成講座の特徴は、正規の授業以外に、シンポジウムを開催して、それを学習の機会にしていること。このため学びが立体的になり、現実接近する。
その事例を2例、紹介する。

(1). 原発の廃炉をめぐる

第5回 サイエンスコミュニケーター養成副専攻講演会
(2018年11月17日良心館305で開催)

原発の問題はサイエンスコミュニケーターの力量が最も問われる課題の一つである。
シンポジウムの冒頭、2011年東日本大震災のあと、2012年6月より東京電力の社長を務め、現在は福島第1原発の廃炉に尽力されている廣瀬直己氏から廃炉の現状を報告いただく。その後、日本テレビアナウンサーの榊太一氏と読売新聞記者の船越翔氏からメディアの立場から、当時の報道の在り方を含め原発の報道についての話があった。勿論、同志社大学側から石浦章一氏特別客員教授、野口範子教授の発言もあり、最後に、サイエンスコミュニケーター養成副専攻履修学生からの質問を受けながら、パネルディスカッションが行われた。

.....

(2). STAP細胞事件：研究不正はなぜ起こり、そして何をもたらしたのか

第6回サイエンスコミュニケーター養成副専攻講演会
(2019年4月20日、良心館305で開催)

STAP細胞に関わる研究不正の経緯について須田 桃子氏（毎日新聞 科学環境部 記者）

から講演があり、続いて、佐藤 優氏（作家・同志社大学 神学部 客員教授）から、分析官としての経験も踏まえて神学の専門家としての講演をいただく。

その後、サイエンスコミュニケーター養成副専攻参画学部から参加の先生方、新 茂之氏（同志社大学 文学部 教授）、小黒 純氏（同志社大学 社会学部 教授）、尾形 健氏（同志社大学 法学部 教授）、田中 靖人氏（同志社大学 経済学部 教授）を交えてパネルディスカッションを行った。なお、野口範子先生は挨拶と趣旨説明、進行役を務められた。

.....

なお、これらのシンポジウムは「サイエンスコミュニケーター養成講座」であるが、これを一般の方へ拡張するという形をとり、多くの方々に聴講いただいた。

.....

4. これらの授業について担当教授の強い思い

(1) サイエンスコミュニケーターにおける授業内容について

野口 範子 生命医科学部 医生命システム学科 教授

準備段階から立ち上げに関わった、この副専攻のコーディネーターです。また、参画学部のハブ役として奮闘しています。春学期にサイエンスナウ3、ビジネスワークショップを担当して、秋学期には佐藤優先生のサイエンスとインテリジェンスに参加して議論に加わっています。研究室では、酸化ストレスと抗酸化をテーマに20人以上の学生と研究に取り組んでいます。これが良心教育を掲げる同志社大学にもっとも相応しい教育プログラムの一つだと、ちょっと本気で考えて、いろいろな学部の扉をたたいて歩いています。つぎに詳細がごさいます。

http://biomedical.doshisha.ac.jp/science_communicator/science_communicator.html

(2) 東京大学流のノウハウで未来の科学者を育成！

石浦 章一 生命医科学部 医生命システム学科 特別客員教授

プロフィール

東京大学名誉教授。分子細胞生物学の分野における世界的な研究者。アミロイドβ発現米を使った経口ワクチンの開発など、独創的観点でアルツハイマー病や筋強直性ジストロフィーの予防・治療を目指す。一般向けの著書も数多く上梓。分かりやすく歯に衣着せぬ解説が人気を博す。

サイエンス・コミュニケーター養成副専攻では、これまでの知識と経験を生かし、専門の枠にとらわれない柔軟な思考と幅広い視野を持った科学者の育成に取り組んでおられる。

つぎのところで動画での石浦先生のお話が観える。

<http://chi-sp.jp/%E7%9F%B3%E6%B5%A6-%E7%AB%A0%E4%B8%80/>

5. 副専攻という仕組み

副専攻制度とは、他の学部や他の分野の学問領域に興味を持った学生が、学部・学科などの枠を超えて主専攻以外の各パッケージ科目群から所定の科目を履修できる制度です。必要単位を完修すれば卒業時に副専攻の履修証明書が発行され、「副専攻修了」と認定する制度です。これでサイエンスコミュニケーターの門戸は大きく広がった。

以上のように同志社大学は新しい時代に向けて積極的に、着実な方法で向かっています。やがて、研究機関だけでなく、各企業の広報担当にも同志社卒のサイエンスコミュニケーターが活躍することでしょう。乞うご期待！

その背景には「良心教育を掲げる同志社大学にもっとも相応しい教育プログラムの一つだ」と考えられて、懸命に汗を流しておられる野口先生のお姿が目に浮かんできました。■

